

## 「ひとりぼっち」が 14 回

『我が著作活動の視点』(1859 年)は、キルケゴールの死後に刊行された彼の実名著である。何より興味深いのは、彼はこの中で率直に自らの物語を語っていることである。そうした意味もあって、彼はあえて生前には刊行しなかった。実際、本書は、キルケゴールの著作活動のみならず、彼の伝記的秘書を読み解く鍵として読まれることが多い。しかしながら、もちろんこの著作も、他の著作と並ぶ彼の作品の一つであるとは言ってもない。

作品中とても印象深いのは、「ひとりぼっち」という言葉が集中して出てくる、あるページである。そこでは 14 回もこの言葉が登場する(田淵義三郎訳、白水社著作集第 18 巻 88 頁)。これらを全部挙げることはできないが、大略次のような感じである。

- どこにいても、だれの前でも、私はひとりぼっちであった。
- 最もおそろしい現実性さえも慰めになるような中で、私はひとりぼっちであった。
- 苦悩の中であって、私はひとりぼっちであった。
- 人間の言葉では言い表せないほど、私はひとりぼっちであった。
- 万人を狂気せしめるような弁証法的緊張において、私はひとりぼっちであった。
- 死ぬばかりの不安の中で、私はひとりぼっちであった。
- 誰にも私を理解させることがかなわない存在の無意味さの中で、私はひとりぼっちであった。

ここで「ひとりぼっち」に当たるデンマーク語は、ene (英語の alone) である。別な日本語訳では「独り」(大谷長訳、創言社著作全集第 14 巻 397～398 頁)となっている。たしかに「独り」の語のほうが、彼の重要な基本概念である単独者 den Enkelte につながりやすい。単語のシラブル数も同じように短く、言葉の含意もまたニュートラルである。

しかし、日本語として味のある表現を選ぶとしたら、「ひとりぼっち」のほうではないだろうか。「独り」の語が「独り生きる」主体的な生き方においても使えるのに対して、「ひとりぼっち」は自らの意に反して「一人になってしまった」という受動的運命をそこに反映している。それは、昨今の「無縁社会」や「社会的孤立」の問題ともオーバーラップしてくるのである。

## 神の前での生き方のカテゴリー

慧眼にも、作家の室井光広は、当該ページに着目して、別な意味合いであるが同じく「ひとりぼっち」だったアンデルセンにも共通する「ひとりぼっちのテーマソング」として、これを論じた(『キルケゴールとアンデルセン』第 20 章「影絵」参照)。この議論は、いわば“室井ワールド”の中で換骨奪胎された室井氏独自の文学論である。本稿では、キルケゴールに即しつつ、私なりに「ひとりぼっちのテーマソング」を語ってみたいと思う。

この ene が頻出するページは、「私の著作活動における摂理の役割」という章の中である。摂理とは、まさに人智を超えた神のはからいのことである。それは、人間の思いがどうであれ、

神がそのように導くままに現れてくる事態を指す。自分が ene となったことも、これを単に受身的な主観の状態として受け取るだけであれば、(神の思いのままに)「ひとりぼっち」にされてしまったということになる。他方、これを積極的な主体的生き方として受け取り直せば、(神の思いのままに)「独り」生きることになる。単独者という生き方がまさにそれである。

日本語だと、主観的と主体的とではずいぶん印象が異なるが、デンマーク語では同じ subjektiv という形容詞である。キルケゴールの思想を端的に表現する言い方に「主体性こそ真理である」とあるが、ここの主体性という言葉も、実は主観性と同じ Subjektivitet という名詞である。どの西欧語においても、主観と主体は同一の言葉である。そして、真理を客観的なもの(客体)の側にはなく、独り生きる者の主観的あり方(主体)に置くのが実存思想の最大の特徴なのである。

キルケゴールはまさにこのことを強調したのであった。忘れてはならないことは、主観的あり方(主体)の側に真理があることを保証する存在が神だということである。この神との逆説的な関わりの中で、人間の生き方は真理ともなれば非真理ともなる。それゆえ ene であることは、神の前に生きるという人間のカテゴリーなのである。

キルケゴール自身がそうであった。彼は著作活動を続けるにあたって、絶え間なく神の助けを必要とし、神以外に何の助けも求めなかった。彼の知己は神だけであり、彼と神の間には他の人間が介在する余地はなかったのである。

## 社会的孤立をはねかえす思想として

上述した「ひとりぼっち」の用例が示しているのは、もしも神との正しい関係がそこになければ、まさしく絶望そのものであるような、そういう人間の極限状態である。それを言い表すには、「独り」よりは「ひとりぼっち」のほうがやはり相応しい。

そこから「無縁社会」や「社会的孤立」の問題を逆照射してみれば、これらの問題は、人間関係の貧しさという世俗の問題の形を取った、超越的な存在(神仏)との関係の貧しさの姿だとも読み替えることができる。寂しさ、やるせなさを感じさせる「ひとりぼっち」の孤独の中で見失っているのは、実を言えば超越的存在である神仏との関係である。この関係が見失われているがゆえに、孤独感はいつそう耐え難い。

しかも、神仏とは絶対的な他者でもあるため、この関わりが無い、あるいは希薄になってしまった人にとって、本来相対的存在であるはずの人間や世間のほうが逆に絶対化されてしまうことになる。「社会的孤立」が往々にして「引きこもり」へと人を追いやりがちなのは、そうした誤れる絶対化の中で自分自身の中に退却させてしまうからである。だが、そうした退却路はどこまでも「ひとりぼっち」の袋小路にしか過ぎない。

我々は一人ひとりが実は皆、単独者である。それが「ひとりぼっち」の主観性の中に陥ることになるか、それとも「独り生きる」という主体性に生きることになるかは、神仏との関わりの中で自らをいかに正しく位置付けるかによる。実存思想とは、こうして「社会的孤立」を内面からはねかえす思想となるのである。